

技術・家庭科（家庭分野）学習指導案

日 時 平成30年6月1日（金）公開授業 I
 学 級 岩手大教育学部附属中学校
 3年A組 39名
 会 場 被服室
 授業者 岩 舘 良 子

1 題材名 A家族・家庭生活 1わたしたちと家族・家庭と地域

2 題材について

わたしたちと家族・家庭と地域「高齢者にかかわる事柄について」事前アンケート

(本校3年生回答数156名)

(1) 生徒観

生徒は社会科や報道, 一般的な知識として, 少子高齢化問題を認識している。実生活に注目すると高齢者との交流やコミュニケーションについては家族間, 多くは祖父母と孫での関係を対象にしたものが主流であり, 家族関係外の世代間交流については限られ人や時間となっている。高齢化に関する諸問題について「学ぶ必要がある」と回答した生徒の中で, その理由を「社会問題であるから」と答えた割合が全体の90%で, 身近な家族や親族の内容に触れる記述は10%であった。その中で, 自分の祖父母や親, 地域社会に住む自分との関わり等, 身近な問題として意識した記述は5%であった。核家族化で祖父母との同居率の低さや, 中学生という思春期の心理面の影響があると推察される。「必要性がない」と答えた生徒の記述は老いに対する恐怖や身体的特徴の理解不足からくる嫌悪感など否定的記述であり, 問題をとらえてはいるが直視したくない葛藤の表れであると考えられる。

質問内容	結果	
Q1 あなたの家に高齢の方65歳以上の人はいますか。(同居していますか)	同居している	17%
Q2 高齢の方と接する機会 家族・親族	年に1~3回	56%
	月に1~3回	16%
	週に1~2回	11%
	毎日	17%
Q3 生活の中で高齢者と関わる機会 家族・親族以外	ない	55%
	近所・地域の人の 習い事の先生など	20%
		12%
Q4 身近な人で介護を必要とする人はいますか。	いる	16%
Q5 高齢の方のことを学ぶ必要があると思いますか。	必要がある	84%
	必要ない	13%
	わからない	3%

また, 家庭生活と地域を考える時, 本校生徒は学区が広域であり, 居住地と学校周辺を生活圏ととらえることができる。共通の地域は学校周辺であり, 周辺施設の利用や通学路などに関わりや馴染みもある。一方で, 学校周辺の地域の一員という自覚は弱く, 安全面などに関わる事項について, 改善点がある。

このような現状から, 家庭生活と地域の人とのつながりについて, 課題があることに気が付かせ, 中学生としての地域社会の一員である自覚を高め, より良い家庭生活を営み, 地域社会に貢献する意識向上を図りたい。

(2) 題材観

日本の社会問題となっている少子高齢化社会。日本総人口は, 平成28年10月1日現在, 1億2,693万人となり, 65歳以上の高齢者人口は, 約3,459万人と高齢化率は27.3%となっている。(平成29年版高齢社会白書(概要版)「A 家族・家庭生活」の内容は家族・家庭や地域との関わりについて, 課題をもって, 家族の立場や役割, 家庭生活・地域の関わりについて理解し, 家族関係や高齢者との関わりに関する基礎的な知識を身に付け, 家族関係をより良くする方法及び高齢者など地域の人々と関わり協働する方法を考え工夫すること

とができるようにすることをねらいとしている。(3) 家族・家庭や地域との関わりのア(イ)では、自分の生活を支える家庭生活が地域との相互の関わりで成り立っていることが分かり、高齢者など地域の人々と協働する必要があることや、高齢者の身体的特徴に触れたうえで、高齢者の介護の基礎に関する体験的な活動ができるよう授業を展開する必要がある。

本題材では、基礎的な介護に関する体験的な活動を通して、高齢者の身体的特徴について理解を深めるとともに、多様な他者を互いに理解し、認め合い受け入れる社会のあり方を考えさせたい。また、地域の施設や介護に関わる専門家から、話を聞くことによってリアリティーある課題を自ら設定させたい。

(3) 学びの本質に迫る指導とその評価について

本校技術・家庭科では、学びの本質を「実生活や実社会の多様な状況において、学んだ知識や技能を活用して問題を解決できる資質・能力の習得」ととらえる。また、育成を目指す資質・能力は、下記の通り定義する。

[知識・技能]

問題を構成する要素を分解して解釈し、それらの関係性、課題を分析し、問題解決に向かって試行を繰り返す、再構築された活用できる知識・技能

[思考力・判断力・表現力等]

実在する条件や制約のある問題を解決する場面において、あらかじめ分かっている正解に収束するのではなく、科学的根拠に基づいて、最適解を導き出す力。

[学びに向かう力・人間性]

生活や社会の中から問題発見、課題化し、互いの意見を尊重しながら、様々な立場の人の意見を踏まえ、自己決定しようとする実践的な態度。

① 学びの本質に迫るための指導の手立て

生徒が、分かろうとするときには、製品を構成する要素を分解して考える必要性が生じる。これが、「ものづくりの科学」であり、「技術的なものの見方や考え方」である。その結果、予測したり、試行したり、議論したり、生徒は問題を課題化し、その中で発見や実感、納得が生まれていくのではないだろうか。以上が、「学びの本質」へ迫るための仮説であり、この過程を経ながら「実践力」を高めていくことで「新しい社会に生きる学び」のアプローチとしたい。そのための学習過程の工夫として、以下の3点を留意し進めていくこととした。

[現実社会における問題の課題化]

家族や家庭・地域の課題するのは、中学生の発達段階では難しい。自立に向け自己を確立しようと模索する時期であり、家族と一定の距離が欲しい思春期でもある。また、課題化することで生徒のプライバシーや家庭状況に踏み入ることになりかねない。そこで、内閣府の意識調査や国勢調査などのデータで社会問題として学ぶ必要性を感じさせる。さらに、自校の生徒実態アンケートで自分自身の生活の中にも課題があることを認識させたい。

[知識の再構築]

高齢者疑似体験を行い高齢者の身体的特徴を、実感を伴って理解させる。身体的特徴から関連する心理的負担や思考にも着目させ課題解決の根拠としたい。疑似体験のみでは自分自身の体験に思考が留まってしまう。本時では、疑似体験をもとに、高齢者とのように関わりをもつか、学んだ知識を生かす場面を具体的に設定し、解決策を模索・思考する活動を通して、単に習得した知識を、活用できる知識として「企画書」にまとめさせる。また、介護の基本的な技能を学ぶ意義を考え、共生社会に向けての視点を生み出したい。

[協働]

本時では、疑似的に交流会の企画を立案する。その中でも、移動に注目させ、身体的特徴からの留意点を

まとめさせる。他者との対話を通して、仲間の見方と違うことや、よりよい方法を追求する姿勢を高めた。話し合いの過程においては、専門家のアドバイスや視点をプラスし、よりリアルな場面を演出し、試行錯誤する中で自分なりの考えを持たせ、広がりや深まりをもたせたい。

②学びの本質に迫るための評価

目標に迫るためにOPPシートを継続して活用する。OPPシートは、題材を貫く問いとして「より良い家庭生活を送るために必要なことは何か」を毎時間記入する。学習を重ねるごとに視野の広がりや視点の変化、思考の変容を自覚させることができ、問題解決に向かう力の育成につながるものとする。また、学習の振り返りで視点の良い記述を、前時の授業を振り返る資料として配布する。他者の異なる意見や、深まりのある表現、思考の変化に触れることを繰り返すことで、自己評価、相互評価の向上にもつなげたい。教師からの積極的な形成的評価として机間巡視や観察から即時性のあるフィードバックを行う。学習過程でフィードバックを行うことで、学習者が改善の方法を具体的に理解することができ、知識や技能を高めることができる。また、本時では話し合いや企画内容の一部を、専門家に評価してもらおう。第三者からのフィードバックでさらに一歩踏み込んだ思考や表現が表出されるものとする。

③学びの本質に迫ったかを見とる評価

題材の終盤にパフォーマンス課題を位置づけた。題材の前半で獲得した知識や技能を活用して、具体的に課題解決に向かう。事前に生徒と評価指標を共有してから学習に取り組む方法もあるが、内容が具体になりすぎること、記述内容が狭まることと予想されるので、この題材では生徒との評価指標の共有は行わず、教師側で指標に沿って評価していく。

3 題材の指導目標及び評価規準

(1) 指導目標

家族・家庭や地域との関わりについて、課題をもって、家族の立場や役割、家庭生活と地域の関わりについて理解し、家族関係や高齢者に関する基礎的・基本的な知識を身に付け、家族関係をよりよくする方法及び高齢者など地域の人々と関わり協働する方法を考え、工夫することができるようにする。

(2) 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
家庭生活や家族の基本的な機能、家庭生活と地域との関わりや高齢者の特徴について理解している。	家庭生活や家族関係、地域における生活について課題を見付け、その解決を目指している。	家庭生活や家族、地域の人々との関わりについて関心をもって学習活動に取り組み、家庭生活や地域をよりよくしようとしている。

4 題材の指導計画及び評価計画（題材名A「家族・家庭生活」（3）家族・家庭や地域とのかかわり 合計5時間扱い）

（○学びの本質に迫るための評価 ●学びの本質に迫ったかを見とる評価）

時間	小題材名	知・技	思・判・表	態度	評価	学習内容
1	家庭のはたらき・家庭と社会	○ A (1) ア		○ A (1) ア	家庭生活のはたらきについて知り、家庭生活の基本的な機能を理解する。 家庭生活と社会との関わりに関心を持ち、家庭生活の課題をとらえ、これからの自分との関わりを考えようとしている。	家庭の機能、家事の外部化から自分や家族の生活が、家庭内外の活動に支えられていることを理解する。男女共同参画社会基本法や育児・介護休業法、内閣府資料（育児と介護のダブルケアの実態に関する調査）等から現代社会の家庭における課題を考える。
2	家庭生活と地域の人々	○ A (1) ア		○ A (1) ア	高齢者疑似体験を通して、高齢者の身体的特徴、心理的負担を理解し課題を主体的に捉え、関わりかたを理解する。	高齢者疑似体験を通して、高齢者の身体的特徴について理解する。 ・筋力の衰え ・視力の低下・視野の狭窄 ・聴力の低下・色覚の変化 ・心理的側面 体験内容から感じた課題から家族や地域との関わり方を理解する。
1 (本時)	地域の人とのふれあい		● A (3) イ		自分の生活や地域の高齢者や地域について課題を見付け、具体策を整理することができる。	高齢者との関わり方について課題を見付け、介助、コミュニケーションについて考え解決策を構想する。意見交流から自分の意見と比較対照し見直し改善することができる。
1	高齢の方とのふれあい体験	● A (4) ア		○ A (4) ア	高齢者の身体的特徴、心理的特徴をふまえて活動し、自分なりに考えたり、工夫したりしている。	地域の高齢者福祉施設を訪問し、高齢者の生活を観察したり、行動の基礎的な介助したり、コミュニケーションを適切に取れるように工夫する。また、介護施設で働く方の高齢者との関わり方を観察する。

(1) 主題 「 家族・家庭や地域とのかかわりを考えよう 」

(2) 指導目標

高齢者疑似体験で理解した高齢者の身体の特徴や介護の基礎的な技術を活用し、高齢者との関わり方や地域の人との協働の必要性を考えさせる。

(3) 評価規準

自分の生活や地域の高齢者や地域について課題を見付け、具体策を整理することができる。

【思考力・判断力・表現】

(4) 指導及び評価の構想

本時は家庭生活と地域の相互の関わりを、高齢者を中心に位置づけて、地域との協働や、家庭生活は地域との相互の関わりで成り立っていることについて理解を深める授業である。高齢者と言っても、その老化の過程にも成熟の過程にも大きな個人差がある。高齢になると、身体の機能が低下したり、通院したりする人は増えるが、多くの高齢者は日常生活に大きな困難をあまり感じていない。(内閣府「高齢社会白書」2012年) また、職業生活で、職人芸と言われる特定の能力を発揮する人もいる。題材の中で「元気な高齢者」と「生活に支援が必要な高齢者」のどちらを取り上げるべきかを検討するうえで、本校のヒューマンセミナー(総合的な学習の時間)との関連を考慮した。高齢で成熟し、元気に人生を歩む「人間国宝」の方と接する時間が設けられており、総合学習との差別化を図り、家庭科としての学びを「家庭に返す」視点から、日常的な介護の基本を取り入れた学習内容とした。

本時の導入では、前時の高齢者疑似体験で学び、実感した高齢者の身体的特徴、心理的特徴を整理しながら、高齢者とのかかわり方について具体的な場面に目を向けさせていく。自分たちの考えについて、専門家の評価を頂くことで視点の変化や、思考の深まりを図りたい。中学生も地域社会の一員であり、中学生の自分が地域の一員としてどのようにすれば高齢者など地域の人々とよく関わり、協働して地域の生活を支えていけるかを考えさせたい。

(5) 本時の展開

段階	学習活動及び学習内容	時間 (分)	■指導上の留意点及び評価 ・学びの本質に迫る指導 ○学びの本質に迫るための評価 ●学びの本質に迫ったかを見とる評価
導入	0 前時の学習の振り返り 1 学習問題を確認する ・疑似体験から高齢の方の身体的特徴, 心理的負担, 付き添って感じたことと付き添われて感じたことを整理する。 2 学習課題の把握 ・課題の内容と条件を確認しねらいを共有する。	5	○前時までの学習を振り返り, レディネスを揃える。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 高齢の方のサポートの仕方はどうしたらよいだろうか </div>			
展開	3 交流会の計画を考える ・身体的特徴、心理的負担からかかわり方を考える。 ・施設内・高齢の方の身体状況のイメージを持つ。 ・移動や交流会の内容, その時どのように関わるかを具体的に計画する。 4 意見の交流をする ・自分の意見をグループで伝える。 ・グループでの話し合いを学習シートに記入する。 5 話し合い・発表の講評 ・ヴィラ加賀野介護福祉さんからの講評。 ・介護福祉士として心掛けている事。 ・基礎的な介助方法の実際の体験。 6 自分の計画の構想を振り返る ・話し合いや、ミニ講話をもとに自分の計画を見直し, 改善点を記入する。	7 10 15	・知識の再構築 高齢者の身体的特徴をふまえ移動や交流会の内容を工夫する (環境・介助・コミュニケーション) ・協働 他者と協力しながら関わりかたや介護の基礎の思考を深める。 ○グループの話し合いを介護福祉士さんが机間巡視する。必要に応じて、アドバイスをする。
終結	7 本時の振り返りの記入 ・計画を通して考えたことや家族や地域について深まった視点について考え学習シートに記入する。	13	●【思考・判断・表現】 自分の生活や地域の高齢者や地域について課題を見付け, 具体策を整理することができる。